

広報あしや

'69

第8号

小学校3年生～中学校3年生用

每学期発行



芦屋市消防本部のたてもの

芦屋の
消 防 **ダイヤル119番**

＝消火、水防、予防、救急＝

2

1年をふりかえる

6

社会科訪問 神戸海洋气象台

8



11月24日、かなしいできごとがありました。宮川小学校の校舎こうしゃの一部を火事ぶで失うしなってしまったのです。みなさんの中には、そのとき
のようすを見て、火のおそろしさをあらためて教おしえられた人も多か
ったことでしょう。芦屋市消防本部しょうぼうほんぶと芦屋市消防団たんの活やく、それ
に市民のかたがたのご協力きょうりょくで、被害ひがいは最少限度さいしょうげんどにいとめられまし
たけれども、ことに冬を迎えて、市民全部ぜんぶの財産ざいさんやみなさんの財産
が、火でうばわれることのないように注意ちゅういしなくてはなりません。

ダイヤル119番

芦屋の消防

火と水をふせぐ

いま、あなたがいる場所で火事が起こったとすれば、どうしますか。しかもそこにいるのが、あなた一人だけならどうでしょうか。

「大声でみんなに知らせる。自分で一一九番へ急報するか、あるいはかけつけてくれた人に電話してもらうように頼む。そして消防車がくるまで、みんなといっしょに、できるかぎり火を消すことにとめる」

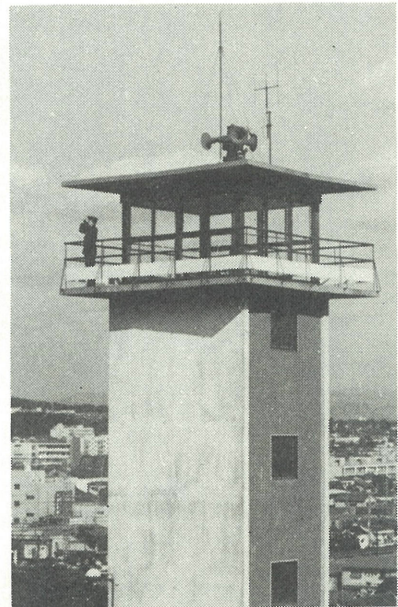
冬は、一年のうちでもっとも火を使うことの多い季節です。みなさんの家の中を見まわしても、ひとつまじがえれば大きな火事のもと



119番の通報を受けて指令を出す通信室

て恐れることはないのです。それらを取り扱うとき、めいめいが当然のことに注意をし、守ればよいのですから。

ところで、さきのことばの中に一一九番という電話番号がでてきました。いうまでもなくこれは、非常のとき消防本部



望ろう。二十四時間中、交替で見はりをつづけている

へ連絡する緊急電話の番号で、

芦屋市内からダイヤルするこの電話は全部、芦屋市消防本部の通信室へつながります。いっぽう、高さが二十メートルある望ろうからは、

火事が起これば一秒でも早く発見しようとして、一人が一時ごと交替しながら双眼鏡でたえずまわりの様子

に注意をはらっています。火事の発生が一一九番へ通報されたり、望ろうから見つけたりしたときは、すぐ



十一月二十四日、宮川小学校で起こった火事

はしごつきの消防自動車は、地上最高二十五メートルまでのびる



油の火災などのときに活やくする化学消防車

マイク放送をしブザーをならして、出動を命令します。夜中でも四十秒くらい後には、消防自動車は走り出しています。山火事するときなら準備のついでで発見から出動まで二三分はかかります。

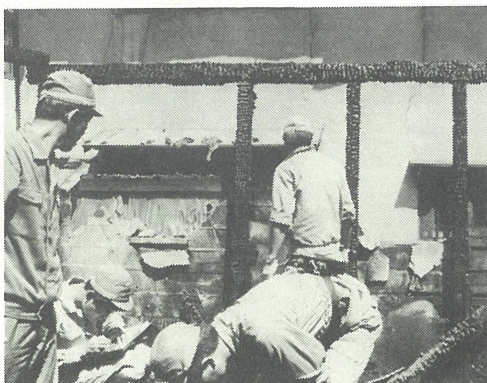
消防自動車が赤いランプをつけ、サイレンをならしながら火事の現場へ向かうとき、ほかの車に道をゆずらせ、また赤信号でも走ってよいのは、



レインジャーの活やく

いつときも早く現場に到着して消火活動をはじめなければならぬからです。火が消えると、焼けあとをすみずみまでこまかく調べ火事の原因をつきとめていきます。これを、原因調査といいます。

芦屋市消防本部には五十二人の職員がおり、普通消防自動車二台、はしご車一台、化学消防車一台、あとにお話する救急車が二台のほか、小型の動力ポンプとそれよりもっと小さい型の動力ポンプが二台ずつあります。また、百二十三人の市民を団員としている芦屋市消防団は、岩園分団、打出分団、山手分団、精道分団という四つの分団からできて



火事のもとをつきとめる原因調査

いて、それぞれの分団に普通消防自動車一台ずつそなわっています。火事が発生したときには、消防団の人たちも現場へかけつけ、いっしょ



水防隊として堤防を守り、川のはんらんをふせぐのも消防のしごと

に消火活動をしてくださっているのです。
火を消すしごとばかりではありません。台風がきたり、大雨がふったりすれば、消防本部と消防団は水防隊となつて、川がはんらんしないよ

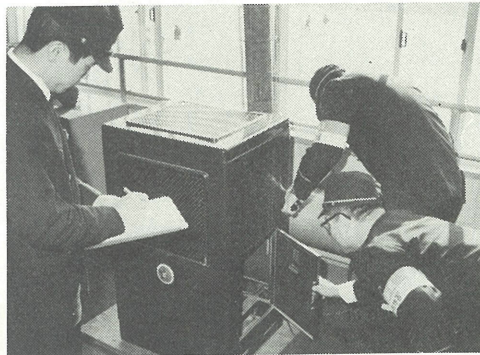
う、堤防がくずれたりしないようにして水をふせぐしごとをします。このような火と水から市民を守るしごとは、気

火事を起こさせない

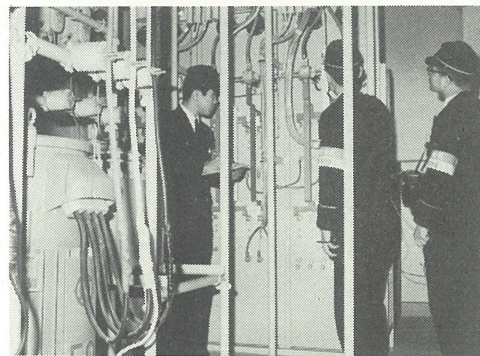
火を消したり、大水をふせいだり、気象の観測をしたりすることだけが消防本部のしごとなのでしょうか。それではありません。火

事を起こさせないこと—これこそがもっともだいじな、そして苦勞のいるしごとなのです。
査察とよばれるしごとは、火事のもともなるおそれのあるところを見つけ、そういう危険な個所をあらためるように指導し、火事の危険をふせいで人のいのちをたいせつにすることを目的としています。そこで消防本部の人は、新しく建つ家や

建てましか改築をする家、ガソリンスタンドのようなどころ、会社の寮や旅館・市場や商店街・映画館などのようなおおいの人が集まるしごころ、それにみなさんの家…、こうしたすべての建物を計画的に立ちいり検査して、指導します。学校、市役所、病院、市民会館などのようなところも査察をするのはいうまでもありません。また、冬がすぎてハイ



学校などの立ちいり検査



電気関係の検査もする

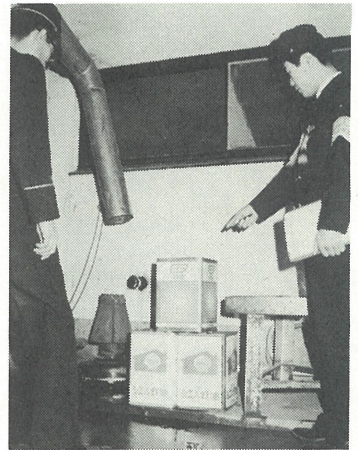


消火に使う水はだいじようぶか

象と深いつながりがあります。だから消防本部は、毎日、風の強さ、風の向き、雨の量、温度や湿度などをしらべる気象観測もしています。

キングのシーズンになりまして、山を守るために警戒隊を編成し、火を使う人たちに指導をしたり、火事やけが人などがあれば早く発見したりするために、山をたえず巡回します。山火事は危険なばかりでなく、長い間かかって育てたたいせつな緑の木を失ってしまいます。この、山を火事から守るしごとを山林警戒といいます。

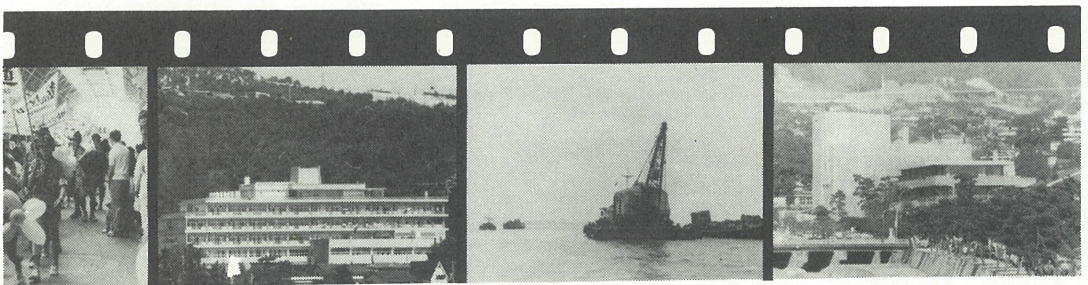
消防活動にどうしても必要なのが人と機械と水です。消防本部の職員は、二十四時間交替の勤務やはげしい活動にたえられるよう、からだをきたえ、訓練をかさね、勉強をしています。機械類は、いつも手入れをして整備し、朝と夜の点検もおこたりません。地水利調査とよぶしごとでは、道路の状態、五百五十六カ所の消火せん、二十カ所の防火水そうなどを調べにまわっています。あまり人目につかず、したがって知って



危険なところを注意し指導する

いる人も少ないと思われるこのような予防のしごとが、実は一番たいせつなしごとなのです。火事になってからでは、もうおそいのですから。

四十四年中、市内では、四十件の火事がありました。原因はたばこの火によるものが一番多くなっています。ちよつとした不注意が、およそ三千八百万円の損害をひき起こしています。火を出さないポイントには、火を使っている場所やその付近に危険はないだろうか、器具の故障とかが、使いかたにまちがいはないだろうか、火のあとしまつはだいじょうぶだろうか—など、めいめいがあたりまえのことに注意をすればよいのです。



全部できあがった芦屋病院

うめたて工事はじまる

もうすぐ開場のルナホール

5日から、建物の高さを制限する高度地区指定が実施されました。太陽が失われないよう、いままでの住みよい環境がこわされないようにするために、この高さの制限をしたことは、芦屋にとって大きなできごとであり、全国からも注目されました。公園や道路わきに木を植え、緑もふえました。あたらしい公園やちびつ子広場もふえました。上の写真でみるように、いろいろの建物や道路などをつくるしごとでも進みました。毎日みているとあまり変わらないようでも、1年をふりかえりますとまちが大きく変化していることに気づかれるでしょう。これらの上にあすが築かれていきます。よりよいあすのために、芦屋のまちの自然と人工の美しさに加えて、この郷土をだいじにしようという人間の美が一体となれば、どんなにすばらしいことでしょう。

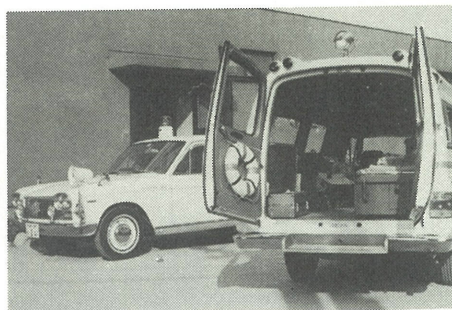
昭和四十一年の四月、赤い消防自動車にまじって白い救急車が消防本部のガレージに並び、活動をはじめました。救急のしごとは、地震、火事などの災害でけがをした人、家の外やおおぜいの人が集まる場所などでけがをしたり急病になった人、家の中のとこでも救急車で病院にはこ

ばなければいのに危険のある人、守るこなしごとをしています。

救急車をそなえ二台になりました。消防本部は、昼も夜も市民の安全を

救急のしごと も一一九番へ

十二月まで)に百八十五件、四十二年中に三百七十二件、四十三年中に三百四十四件、四十四年中に四百三十二件となっています。これらは、一一九番へ連絡があつて、最初に話

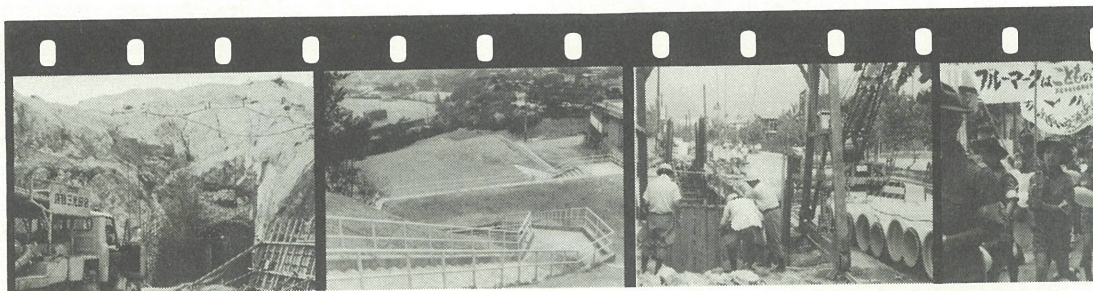


救急車は二台そなえている

まず応急の手あて

行きだおれの人などを、けがや病気のぐあいをたしかめ、応急の処置をしたうえで、早く安全に病院まではこぶのです。

救急車が活動したのは、四十二年(四月から



新しい貯水池をつくる工事

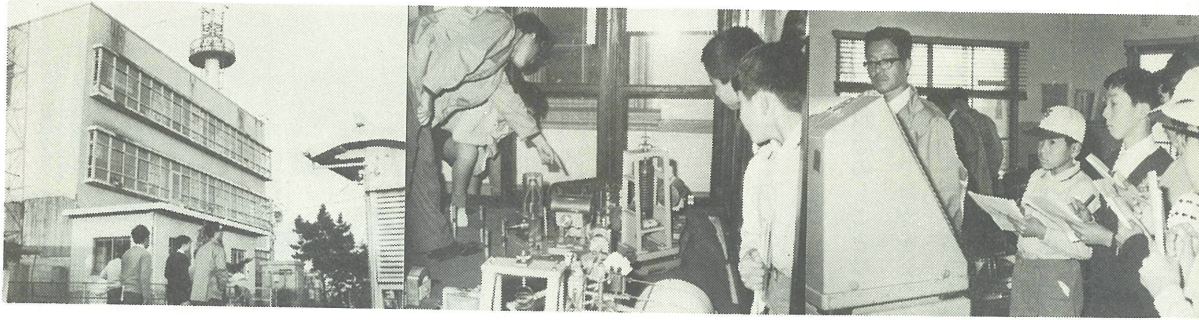
1期工事がすんだ前山公園

下水道管をうめる工事

1年をふりかえる

あらたなあゆみをふみ出すとき、そこでちょっと立ちどまって過ぎた日のことをふりかえてみましょう。きょうはどうだったろうか、きのうはどうだったろうか、ことしはどうだったろうか。ときどき反省をしてみるということは、あすが、きょうまでかかって築きあげた基盤の上につくられていきますから、たいへんたいせつなことです。そこで、みなさんといっしょに、わたくしたちのまちについてふりかえてみようと思います。

芦屋はみんなのくらしの場です。太陽と緑と広場は、市民のくらしになくはならないものですが、高い建物ができたために日があたらなくなったというようなことをなくすために、44年1月



社会科学訪問 第8回

神戸のまちの山手に、高いアンテナ塔やドームのそなわった白い建て物があります。それが、きょうぼくたちが訪問した神戸海洋気象台です。ぼくたちは、気象台の人から、いろいろなお話を聞きました。【精道小学校気象天文クラブ、逸見義行 岸篤郎、土屋紳二郎、吉年直紀（以上六年）、袴田剛（五年）】

気象観測のしくみ 日本の気象台は、気象庁の下に札幌・仙台・東京・大阪・福岡の五つの管区気象台と、四十五の地方気象台、百二の測候所があり、神戸・函館・舞鶴・長崎の四方所には海洋気象台がおかれています。さらに、東京には航空気象台もあって、気象台や測候所で観測した記録は、ぜんぶ気象庁に集められます。

海洋気象台のはたらき 海洋気象台のおもなしごとは、海洋観測です。これは、潮流の動きや水温、塩分、プランクトンなどの調査をすることで、神戸海洋気象台の場合だと、黒潮についてこうした調査をしていて、その受け持ちのはんいは、九州の東から伊豆半島までの広い海にわたっています。また、海面付近の気温、風、水温の観測をはじめ

春風丸第二世号が活躍しており、乗り組まれている科学者は一カ月も二カ月も海で働くことがあるというお話しにぼくたちはびっくりしました。予報のしごとともたいせつな役目のひとつで、これには海上予報と陸上予報とがあります。海上予報は受け持ちの海上の気象予報や警報を、海上保安部、漁業用海岸局を通じて無線放送したり、ラジオ放送で船舶に知らせ海難事故の防止につとめているそうです。いっぽう陸上予報は、兵庫県内の気象予報、警報を発表し

神戸海洋気象台

ていて、このしごとが、いちばんぼくたちの生活と関係が深いものです。さらに気象関係のしごとほかに、地震の観測と調査などもしています。**気象台を見学して** お話を聞いたあと、ぼくたちは気象台の中を見せていただきました。

最初に見たのは、いろいろな天気図や通信機械のあるへや（写真右）で、各地から送られてくる観測記録はぜんぶここで受信し、また反対に、予報などはこのへやから海上

保安部や放送局、新聞社を通じて船や家庭に知らされます。へやの中では、係りの人が天気図をまとめておられました。ぼくたちは学校のクラブ活動で天気図を書いているので、きょう味深く見ているのですが、そのあいだにも横の方から機械の音が聞こえてきます。ちようど、気象庁から天気図が電送されてきているところで、その向こうでは、無線観測局や漁船などから電波で送られてくる資料を、自動タイプライターのような機械が記録していました。そのほ

か、「通信衛星エッサ」が撮影した雲の写真も気象庁をおして電送されてくるし、気象庁では世界各国と気象を知らせあつているそうで、係りのおじさんは「気象観測に国境はありませんよ」とおっしゃっていました。

通信室を出て、庭の雨量計や百葉箱を見たあと、ぼくたちは地震計室（写真中）へ案内されました。暗いへやの中に大きなガラス張りの箱があつて、その中に強い地震を記録する強震計と、普通地震計とが置かれてありました。そのほかにも春風丸が採集してきた海洋資料を化学分析するへやははじめ、気圧計や風速計など観測に使う器具が正確かどうかを検定するところなどを見ましたが、どれをとつても人々を天災から守るためのおしごとばかりです。

見学を終えて最後に、おじさんは「気象台のしごとで楽しいことは、自分のやったことがうまいくいつたとき、つまり的確な予報が出せたときですが、そのために毎日が努力の連続です」とおっしゃいました。おじさんのお話しは、ぼくたちの学校生活でもいえることだと思えました。